

選句「自分の家に帰りなさい。そして、身内の人に、主があなを憐れみ、あなにしてくださったことをことごとく知らせなさい。」(19)

1、今日の箇所は「悪霊に取りつかれたゲラサの人をいやす」物語です。キリスト教が整えられ「キリスト論」「贖罪論」「終末論」などと教義にまとめられた中では全く出てこない「民間説話」に基づく古いお話です。ゲラサはガリラヤ湖から60Km内陸部、デカ(十の意味)ポリス(都市)地方の一つです。物語の主人公はレギオン(ローマの6000人軍団の名)という悪霊にとりつかれて狂暴になり、墓場にすむいわば「精神病者・狂人」です。そしてイエスはその人を癒したという奇跡物語です。

「この人から出てゆけ」というイエスの言葉で、レギオンは近くの2000頭の豚に入っ、豚は湖に入って溺れ死んだ、という何とも激しいお話です。人々はイエスにその地方から出て行ってもらいたいと言います。正気に戻った人はイエスと一緒にいきたいと願ったのに、「家に帰りなさい・・・(出来事を)ことごとく知らせなさい」といわれ、デカポリス地方にイエスの出来事を宣べ伝えた(ケリュセイン)というお話です。

2、マルコの年代から考えると、初期キリスト教はかなり整った「教え」を持っていました。けれど、それを知っていてマルコは、あえてこういうドロドロした説話を大事にして伝えています。逆に、このお話を、私たちは現代的にあまり「非神話化」(現代的解釈)してしまわないで、このゲラサのイエス物語の持つ重みを感じ取る必要があるのではないか、と思います。

3、マルコを使った同じ物語のマタイ版(8:28-34)では、短くして、「ゲラサ」をもっと湖に近い「ガダラ」として「悪霊に取りつかれた人」を2人に行っている(律法の証人規定の2人に基づく)、また「帰還命令」を省いています。ルカ版(8:28-39)は、マルコをほぼ踏襲しますが、悪霊の行く先に「底無しの淵」を加えたり「デカポリス」を削除したりして、合理化を計っています。この物語では、ゲラサやデカポリスの固有さが大事で、それは「宣教」そのものの中身なのです。

4、我々は、皆イエスとの出会いの固有な場と時、そして物語を持っています。そこが大事なです。概念化、抽象化、教義化は福音の事柄の整理、思考の過程では必要でしょう。しかし、概念が「福音」ではないのです。ドロドロした経験談、私にしかない物語、つまり「主があなを憐れみ、あなにしてくださったこと」(19)を自覚して、イエスとの出会いの物語を語るそのものが大事なのです。

5、「私が洗礼を受けたのは、私の意思でなく、母の選択でした。神の愛を信じる母にとって、信仰は、この世の最高の宝でした。自分にとって最高のものを、母は私に伝えたのです。それが母として子に与えることのできるかけがえのない贈り物だったのです。私はこれからも悩み、もがきため息をつきながら生きてゆくでしょう。でも、私にはっきりわかっていることが一つあります。それは、母が私を結びつけた神から、決して離れないだろうということです」。遠藤周作の語りです。